

クロアチアと日本の交流史に関する一考察

石田信一

はじめに

日本にとってバルカン諸国は地理的な隔たり以上に遠い存在である。最近でこそ旧ユーゴ紛争の報道によって一定の情報もたらされるようになったとはいえ、その認知度はいまだに高くはない。日本とバルカン諸国の相互交流はすでに明治期には始まっております、それなりの蓄積があることも事実であるが、両者の交流史に関する本格的な研究は『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究——一九八一年九月国際シンポジウムの報告集』(東欧史研究会・日本東欧関係研究会、一九八二)が唯一のものであり、未解明あるいは未整理の部分も少なくない。その意味でもきわめて興味深い研究対象であるといえる。

本稿はバルカン諸国のなかでもとくに先行研究の少ないクロアチアと日本の交流史に関して、大まかな見取り図を提示すること

を目的としている。ただし、紙幅の制約から、考察の対象を日本と旧ユーゴスラヴィア連邦の国交正常化が実現する一九五〇年代までの時期に限定する。すべてのバルカン諸国を視野に入れた包括的な研究の第一歩としたい。

なお、本稿は平成二一年度跡見学園女子大学特別研究助成費(研究題目「日本とバルカン諸国の文化交流に関する基礎的研究」)による研究成果の一部である。

一. オーストリア＝ハンガリー帝国時代

クロアチアは一二世紀以来ハンガリー王国と連合関係を結びつ、一六世紀にはハプスブルク朝の支配下に入った。一八六七年にハプスブルク皇帝を戴くオーストリア＝ハンガリー二重君主国が成立すると、クロアチアはそのハンガリー部分に帰属する自治

国家となった。日本とオーストリアハンガリーとの外交関係が樹立されたのは、二重君主国が成立して間もない一八六九年であり、その際、間接的にはあるがクロアチアとの結びつきも生じたことになる。同じ一八六九年、『中外新聞』（第三六号）にダルマチアの一揆に関する記事が掲載されているが、それが日本における最初のクロアチア関連記事であると思われる⁽²⁾。

むろん、すぐさま日本とクロアチアの直接的な交流が始まったわけではなく、当初は相手国の正確な情報を把握することさえ困難な状況が続いた。日本における初期のクロアチアに関する基礎情報としては、一八七三年にウィーン万国博覧会を視察した岩倉使節団（特命全権大使岩倉具視）の大使随行であった久米邦武の編集した『特命全権大使米欧回覧実記』（博聞社、一八七八）の記述が最も重要である。同書には、オーストリアハンガリー各地の概観があり、その中に現在クロアチア領となっているダルマチア、沿海地方（キュステンラント）、軍政国境地帯およびクロアチア・スラヴォニアに関する記述も含まれているのである。例えば、オーストリアハンガリーのオーストリア側に属する諸州に関しては相対的に詳しい記述があり、「タルマチア」（ダルマチア）州に関しては、『アドリヤチック』海ノ東浜ニ於テ、一帯ノ地方ナリ、山脈ヲ以テ、土耳其ニ界フ、幅員四千九百三十七方英里、人口四十五万四千六百十六人、国民ハ『スラヴォニヤ』人種ノ住域ニテ、以太利人種五万アリ、宗教ハ羅馬教ヲ奉シ、希臘教七分

ノ一アリ、首府『サラン』（ザダル）ハ、人口三万⁽³⁾と述べられている。また、『ミリタイル、グレンツ』（軍政国境地帯）に関しては、「此土ニ限り、男子ハミナ兵夫トナラシメ、武官ヲ以テ管轄ヲナサシム、其幅員一万二千九百四十九方英里、人口百十九万五千〇三十三人『クラキユン』（クロアチア）及ヒ『セルペン』（セルビア）（皆『スラヴォニヤ』ノ一種）人ノ住域ニテ、東羅馬尼人及ヒ些少ノ独逸人アリ、ミナ羅馬希臘両教ヲ奉ス、現ニ常備ノ兵数ハ二十万アリ⁽⁴⁾と述べられている。一方、オーストリアハンガリーのハンガリー側に属するクロアチア・スラヴォニアに関しては、単独での記述はなく、ハンガリー南部に『スラーネン』（スラヴォニア）および『グラチェン』（クロアチア）地方があり、その住民は『グラーチェン人種』に属することが触れられているに過ぎない⁽⁵⁾。岩倉使節団の関心がクロアチアのような見るべき産業もない一地方に向けられなかったことに加えて、トリエステ・ウィーン間の鉄道ルート上に位置するスロヴェニアのように經由地にもならなかったため、全体的に単なる地誌的な記述にとどまっている。

その後も日本とクロアチアの交流は希薄であった。明治期にクロアチアを訪れた日本人の記録もほとんど残っていない。例外的に、一八八〇年代に海軍大佐西郷従道伯爵がオーストリアの軍港プーラ（現在クロアチア領）に滞在していたという記録があるが、詳細は不明である⁽⁶⁾。クロアチアでは、一九世紀末から文学雑誌や

新聞に日本文学の紹介記事が掲載されるようになり、また日露戦争に際して書籍が刊行されるなど、日本に対する関心が高まったようであるが、相互交流の観点から大きな進展が見られたわけではない。また、それと比べても、日本人のクロアチアに対する関心は低かった。それが多少なりとも変化したのは、バルカン戦争（一九一二～一三年）から第一次世界大戦（一九一四～一八年）にかけての時期である。

第一次世界大戦期には、日本でもようやくクロアチアに関する詳しい記述が現われるようになった。なかでも長瀬鳳輔と内藤智秀の共著『巴爾幹の変遷』（富山房、一九一四）およびその続編『現代バルカン』（宝文館、一九一六）が注目される。いずれも人名・地名等の誤記はもとより、不正確な叙述が少なくないが、セルビア人とクロアチア人の対立感情について、歴史・文学・言語・宗教・人種などの類似性を挙げながら、「南方スラヴ民族の問題は共通点を見出して居る彼等を連合させて、連邦政治を組織するのが最善の方法」であると述べるなど、その着眼点は今日でも通用するものが多い。さらに、断片的な記述ではあるが、名前が挙げられているクロアチア人が、ルネサンス期の文人「ルシー」（ルチチ、Ivan Lucic）および「ヘクトロピッチ」（ヘクトロヴィチ、Petar Hektorovic）、南スラヴ統一理念の先駆者・推進者「クリザニッチ」（クリジヤニチ、Juraj Krizanic）、「ドラスコヴィッチ」（ドランシュコヴィチ、Janko Draskovic）、「ブラッツ」（ヴラス、Stanko

Vras）、「マジュラニッチ」（マジュラニチ、Ivan Mazuranic）、「ストロスマイヤー」（シウトロスマイエル、Josip Strossmayer）であることも興味深い。そこにも、著者の南スラヴ統一理念への共感が読み取れる。

また、大日本文明協会編『奥地利匈牙利』（大日本文明協会、一九一六）においては、オーストリア＝ハンガリーの「イリリア州」として、クロアチア・スラヴォニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ダルマチアが紹介されている。すでに存在していない「イリリア州」という呼称を用いている、ダルマチアにトリエステまで含んでいる、ダルマチアの州都ザダルを無視してドゥブロヴニクを「首府」と記しているなどの誤認も指摘できるが、全体的に要点を押さえた簡明な叙述が特徴的である。クロアチア・スラヴォニアが「二重君主国中最も古く統一した国であつて、独立の歴史は九二四年から始まつてゐる。此の年にトミスラフが自ら此地方を統一して、王となつたのである。其後クロアチア人は数次匈牙利と同一の王を戴いたこともある。故に今の君主制も決して彼等には新規ではなが、クロアチア人は二国が対等の関係で共同の君主に結び附けられたものと思つてゐるのに、匈牙利人はクロアチア・スラヴォニアを匈牙利に属する一州と看做さんとしてゐる」（三五六頁）と記されているのも、その一例である。それでも「クロアチア人の性質は工業には適しないやうである。今日に至るまで、殆ど国民發達史の第一期に止まつて居つて、農業

即ち人の自然的需要品を、土壌から供給する業を主要の生業としてゐる姿である」(三五九頁)といった偏見と思われる箇所も見られる。歴史叙述においては、すでに触れた初代クロアチア国王「トミスラフ」(トミスラヴ、Tomislav)に加えて、一八四八年革命期に活躍したクロアチア総督「イエラチ、」(一二三―一二七頁)(イエラチチ、Josip Jelacic)、ドゥブロヴニク出身の数学者「ボス・コヴィク」(三七〇頁)(ボシユコヴィチ、Rudjer Boskovic)らが紹介されている。

このほか、第一次世界大戦期には、時野谷常三郎『バルカンの風雲』(アカギ叢書、一九一四)、高桑駒吉『東方問題とバルカン半島』(時局問題研究会、一九一五)などのバルカン諸国関連書籍が刊行され、内藤民治『瑞典・諾威・丁抹・巴爾幹(世界実観 第一〇巻)』(日本風俗図絵刊行会、一九一六)などの地理書も登場しているが、これらにおいてクロアチアが中心的に取り上げられることはなかった。

二、ユーゴスラヴィア王国時代

第一次世界大戦後、オーストリア＝ハンガリー帝国は崩壊し、旧帝国領のうちクロアチア人が住民の多数派を占めるクロアチア・スラヴォニアおよびダルマチアは一九一八年二月一日にセルビア王朝の下に統合された新国家「セルビア人・クロアチア

人・スロヴェニア人王国」の一部をなすこととなった。ユーゴスラヴィア王国の前身である。日本は、一九一九年五月三〇日にこの新国家を承認し、一九二三年一月一六日に通商航海条約をウイーンで締結している。しかし、その関係は日本にとって「便宜的なものでもあり、また『大國主義』的な観点からのものでもあった⁽¹⁰⁾」ことが指摘されている。

それでも、一九二四年二月四日、「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国」公使館が東京に設置された。この公使館は、一九二九年に同国がユーゴスラヴィア王国と改称したことにより、そのままユーゴスラヴィア王国公使館となった。同年一二月には、大阪に領事館も設置されている。ただし、これらの公使館・領事館の具体的な活動内容については未詳である。両大戦間期に日本を訪れたクロアチア人としてもっとも有名なのは、一九三三年にユーゴスラヴィアの新聞『ポリテイカ』(Politika)の特派員として来日し、のちにゾルゲ事件に連座して逮捕され、網走の獄中で亡くなったB・ヴケリチ (Branko Vukelic) であろう。

一方、日本は両大戦間期を通じてユーゴスラヴィアに公使館を設置しなかった。一九二四年二月から一九三九年九月までは在ルーマニア公使が、⁽¹¹⁾それ以降は在ハンガリー公使が、⁽¹²⁾在ユーゴスラヴィア公使を兼任したのである。

なお、ユーゴスラヴィアは「対外的には一九二〇年代の小協商(チェコスロヴァキア、ルーマニア、ユーゴスラヴィア)に加え、

三〇年代のバルカン協商（ギリシア、トルコ、ルーマニア、ユーゴスラヴィア）によってフランスをうしろだてとしつつ、新国家の安全保障体制を築いて¹³。しかし、国内的にはセルビア人を中心とする集権体制に不満を持つクロアチア人などによる政治闘争が絶えず、結果的に自立を求めるクロアチア人のドイツ、イタリアへの接近を促すこととなった。

両大戦間期を通じて、日本でも複数のバルカン関連書籍が刊行されており、ユーゴスラヴィアに関する言及も見られる。長瀬鳳輔『巴爾幹の将来』（外交時報社出版部、一九二〇）、信夫淳平『巴爾幹外交史論』（大鏡閣、一九二二）、久留義郷『敗残の国々を辿りて 獨逸及巴爾幹』（日本評論社出版部、一九二二）など外交官やジャーナリストによる著作に加えて、地理学の分野で『世界地理風俗大系 第一六巻 バルカン及ポーランド』（新光社、一九三〇）、『世界現状大観 第八巻 土耳其・バルカン諸国篇』（新潮社、一九三一）などが刊行され、概括的な紹介がなされていた。このほか、官庁による調査報告として、通信省管船局監理課編『巴爾幹及近東諸国事情』（管船局監理課、一九二七）、外務省通商局編『巴爾幹諸国經濟事情』（外務省通商局、一九三〇）なども刊行されている。

前述の書籍のうち、『世界地理風俗大系』（ユーゴスラヴィア関係の分担執筆者は布利秋）は、第一次世界大戦前後の変化について必ずしも正確に認識しておらず、¹⁴ クロアチアの範囲にスロヴェ

ニアが含まれているなどの不適当な区分も見られるが、細部にわたる非常に詳しい記述が特徴的である。ザグレブだけでなく、オシエク、シサク、カルロヴァツ、ザダル、スプリット、ドゥブロヴニクなどの都市やクルカ瀑布など名勝も紹介されている。ただし、人種論が盛んであった当時の状況を反映してか、「ブルガリヤ人は性質粗野で、尚武の気象に富み、剽悍で迷信にかぶれ、民族的に燃える愛国心を抱いてゐる。よく困難に堪へ、至つて鈍感で不撓不屈の性情に生き、常に保守的ではあるが何らかの幻影を追うてゐる。そして芸術、美術の趣味を欠くも、音楽を愛する農牧民族である。セルヴィヤ人も殆どブルガリヤ人と共通した心持をもつてゐるが、より以上に深慮を有して、計画性に富んでゐる。そしてスラヴォニヤ人、クロアチヤ人、ボスニヤ人、ヘルツェゴヴィナ人、ダルマティヤ人なども、セルヴィヤ人と共通点をもつた上に、芸術、美術、音楽を愛する気持がある」（九七頁）といった俗説の類を延々と展開している。また、同書はユーゴスラヴィアに関して「ダルマティヤとクロアチヤとベルグラード（ベオグラード）附近は、国際的に教化されてゐるが、ボスニアの東部と、モンテネグロ並びにセルヴィヤの南方は、半開的である」（二四七頁）と結論づけている。要するに、ここに引用したような現在から見れば違和感のある記述こそが、当時の日本人のこの地域に対する認識・関心の程度を示すものと考えられよう。

なお、ユーゴスラヴィアを取り上げる場合でも、その文学作品

について触れられる機会は稀であった。ほとんど唯一とも言える例外が『芬蘭・セルヴィア神話伝説集』(近代社、一九三三)である。そこには英語からの重訳ながらヴーク・カラジチ (Vuk Karadzic) 採録のセルビア民話(クロアチア民話ではない)が掲載されていたのである。両大戦間期を通じてポーランド、チェコ、ハンガリー、ブルガリアなど他の東中欧諸国の文学作品が次々と日本語に翻訳・出版されたことを考慮すると、かえって不思議なほどである。

一方、両大戦間期にユーゴスラヴィアで刊行された日本関連書籍は必ずしも多いとは言えない。当時クロアチアはユーゴスラヴィア王国の一部であり、書籍の流通に支障がなかったであろうこと、そしてクロアチア語とセルビア語が使用する文字の違いを除けば殆ど同じ言語であること(実際に「セルビア・クロアチア語」と呼ばれていた時期が長い)を考慮し、ここではクロアチア以外の地域で出版されたものを含めることにするが、それでも(1) J・アゲディチの『東方紀行』(ソンボル、一九二四)⁽¹⁵⁾、(2) M・ラドヴァノヴィチの『日本帝国主義の歴史地理的・経済的基礎』(ベオグラード、一九三二)⁽¹⁶⁾、(3) H・M・ロレンツの『なぜ日本は戦うのか』(ザグレブ、一九三三)⁽¹⁷⁾、(4) K・ビエラフスキフの『ロシアと日本の新たな戦争』(ザグレブ、一九三四)⁽¹⁸⁾、(5) M・マリニコヴィチの『日本と日本人』(ベオグラード、一九三三)⁽¹⁹⁾などに限られる。その中では(5)が地理的概観、歴史的概

観、政治体制、経済体制、芸術・社会・宗教、地政学的概観という構成をとりつつ、日本に関する基礎情報を提供しようとする試みであり、クロアチア人の対日認識にも一定の影響を及ぼしたと考えられる。

このほか、この時期のユーゴスラヴィアを代表する文学者やジャーナリストが文学雑誌等を通じて日本文学の紹介を行っている。例えば、M・ツルニャンスキは「古い日本の詩」や「俳諧」⁽²⁰⁾を、Z・ゴリヤンは『黄色い東方の抒情詩』を、A・チエティネオは「現代日本の詩人たち」⁽²²⁾を、それぞれ発表している。ザグレブを拠点に活動したゴリヤンの詩集は、山上憶良、柿本人麻呂、額田王、紀友則、紫式部らの古典和歌をドイツ語、英語、フランス語から翻訳したアンソロジーである。また、必ずしも日本文学とは言えないが、Z・シュポリヤル編『日本の民話』(ザグレブ、一九二三)⁽²³⁾やJ・イブレレル (Janko Iber) によるラフカディオ・ハーンの『心』(Kokoro: hints and echoes of Japanese inner life) の翻訳が注目に値する。⁽²⁴⁾ さらに、I・セクリチ (Isidora Sekulic) が能に関する論文を発表しており、⁽²⁵⁾ 日本文化への関心の高まりが看取できる。この点では、ユーゴスラヴィアあるいはクロアチアの文学・文化を殆ど取り上げることのなかった日本側の状況とは大きく異なっている。

三、「クロアチア独立国」時代

第二次世界大戦の開戦後、ユーゴスラヴィア王国を取り巻く国々は、ギリシアを唯一の例外として、いずれも枢軸陣営に加わる事となった。一九四〇年九月二七日に日独伊三国同盟が成立すると、ハンガリー（二月二〇日）、ルーマニア（二月二三日）、ブルガリア（一九四一年三月一日）も、これに参加したのである。アルバニアはすでに一九三九年四月にイタリアに併合されていた。そうした中で、ユーゴスラヴィアも一九四一年三月二五日に三国同盟への加盟を余儀なくされたが、翌々日にはこれに抗議する軍部によってクーデタが敢行され、中立路線の回復がはかられるようになった。

こうした動きに対して、四月六日、ドイツ軍・イタリア軍・ハンガリー軍・ブルガリア軍が四方からユーゴスラヴィアに侵攻し、短期間に全土を分割・占領するに至った（四月一七日降伏）。枢軸諸国に対する国境地帯の割譲に加えて、ユーゴスラヴィアの国家解体、すなわちセルビア、モンテネグロ、クロアチアへの分割が決定された。その過程で、ファシスト団体「ウスタシャ」の指導者A・パヴェリチ (Ante Pavelic) を「首領」とする「クロアチア独立国」樹立が宣言されたのである（四月九日）。

「クロアチア独立国」を承認したのは枢軸諸国に限られていたが、一九四一年六月七日、日本は「独立国」を承認し、同国が外

交関係を樹立した数少ない国の一つとなった。⁽²⁶⁾しかし、当面の連絡業務は引き続き在ハンガリー公使館が担当しており、実際に「独立国」の首都ザグレブに日本公使館が開設されたのは、それから二年半以上も経過した一九四四年二月一日のことであった。⁽²⁷⁾すでに一九四三年一月一五日に在ドイツ大使館の一等書記官であった三浦和一がザグレブに到着しており、そのまま臨時代理公使となっている。最初はエスプラナーデ・ホテルの一室が事務所となっていたが、まもなくズリニェヴァツ広場に面した自動車クラブのビルに公使館が開設されたという。⁽²⁸⁾皮肉にも、日本にとつて旧ユーゴスラヴィア地域における最初の在外公館ということになる（この公使館は同時に満州国をも代表するものであった⁽²⁹⁾）。その活動の詳細は不明であるが、「独立国」が崩壊する寸前の一九四五年五月六日に引揚・閉鎖となっている。なお、クロアチア側は最後まで日本に外交団を派遣しなかった。

「クロアチア独立国」で刊行された日本関連書籍としては、F・ハイターとS・パヴィチチの共著『神国日本』（ザグレブ、一九四〇⁽³⁰⁾）と三浦和一の『日本人が語る日本』（ザグレブ、一九四四⁽³¹⁾）が挙げられる。三浦和一公使の著作には日本クロアチア協会の会長を務めたミレ・ブダク (Mile Budak) 副首領が巻頭言を寄せているが、現地の新聞・雑誌に掲載した記事の再録も多く、内容的にも雑然とした印象を受ける。巻末には三〇項目からなる「小事典」が添付されている。

なお、ドイツ占領下にあったベオグラードでも、日本関連書籍が三篇ほど刊行されているが、クロアチアにおいて何らかの影響を及ぼしえたかは疑わしい。

一方、日本では、第二次世界大戦の開戦前夜からバルカン関連書籍が相次いで出版されていた。大類伸『列強現勢史・東中欧諸国』（富山房、一九三九）、芦田均『バルカン』（岩波書店、一九三九）のほか、英国王室国際問題研究所編（仙波太郎訳）『バルカンの政治経済』（清和書店、一九三九）、パウエル・ロールバツハ『バルカン・トルコ 宿命のヨーロッパ東南角』（栗田書店、一九四〇）、根岸謙『風雲のバルカン』（博文館、一九四〇）、W・ホフマン（工藤長祝編）『宝庫バルカンの真相』（鐵十字社、一九四一）、エルンスト・ワーゲマン（神戸政彌訳）『バルカン』（興成書房、一九四二）、大屋久寿雄『バルカン近東の戦時外交』（同盟通信社、一九四二）、ペーター・アルクス編『バルカン戦記』（刀江書院、一九四二）などがある。このうち、とくに大類伸『列強現勢史・東中欧諸国』と芦田均『バルカン』は詳細かつ正確な記述と現在でも通用しうる有益な示唆を含んでおり、参照する価値がある。③④ 後者の中から、クロアチアに関する記述を引用してみよう。

「ユーゴスラヴィアの文化を背負つてゐるのは、クロアチア人である。国内のインテリゲンチユアの大部分はクロアチア人であつて、文化的教養の程度からいふと、彼等はセルビア人より遙

かに優つてゐる。彼等は文化的であり、同時に芸術的でもある。多年奥洪国の支配を受けた歴史的関係から彼等に注入される文化は、ウィーンとブダペストから流れてくる。彼等は又實際的であるよりは寧ろ理論的である。然るに国内の政治的実権は殆どすべてセルビア人によつて握られてゐると云つてもよい」（二五八頁）。

「セルビア人とクロアチア人とは同一の言語と文学とをもつてゐるにも拘らず、文化の系統から見れば二つの異つた集団である。：クロアチア人から見ればセルビア人は異端者である。その上にクロアチアが西欧文化地帯に属する関係から、セルビアよりも高度の文明をもつと自惚れて居り、セルビア人を目して鉄面皮な成り上がり者として軽蔑する。これに対してセルビア人はクロアチア人を陳腐な文化に陶醉するものとして反感をもつのである。：クロアチアとスロヴェニアは工業国としての要素を備へてゐる地方であるが、セルビア、ボスニア、ヘルツェゴヴィナ等は孰れも純農業地である。クロアチアとスロヴェニアは旧奥匈帝国時代に國庫の補助を受けて工業開発に従事してゐたが、新國家の下に於ては、徒に高率の課税をうけて、農業地方の為に犠牲にされたと考へてゐる」（二七二―二七三頁）。

なお、芦田均『バルカン』における「欧州の開戦と共に、バルカン方面に対するドイツとソ連邦の触手がどの程度に伸びるかは今なほ明白ではない。：民族生存の悩はかくしてなほ永劫の未来に残されるのであらう」（二八〇頁）という記述は、現在から見れば

ば、きわめて示唆的である。すでに触れたように、その後まもなくユーゴスラヴィアは枢軸諸国によって分割・占領され、一時は亡国の憂き目にあう結果となるからである。

四．ユーゴスラヴィア連邦時代（国交樹立まで）

第二次世界大戦中、ユーゴスラヴィア共産党を主力とするパルチザン闘争が各地で展開され、一九四五年三月七日、共産党首ティトー（Josip Broz Tito）を首班とする「ユーゴスラヴィア民主連邦」臨時政府が樹立された。すでに「クロアチア独立国」は実効支配地域を著しく縮小させていたが、同年五月八日にザグレブを放棄したことで、事実上消滅してしまっただ。臨時政府が準備した憲法制定議会によって、同年一月二九日、戦前の王制廃止とユーゴスラヴィア連邦人民共和国の樹立が宣言された。クロアチアはこの新たな連邦国家を構成する一共和国として位置づけられることとなった。

日本がユーゴスラヴィアとの国交を回復するのは、第二次世界大戦の講和条約であるサンフランシスコ条約が発効した一九五二年四月二八日のことであつたとされる。一九五二年という早い時期に両国の国交回復が実現したことは、独自の社会主義路線を歩み始めていたユーゴスラヴィアの特殊性が反映されていると考えられよう。というのも、ソ連の影響下にあつた他の東欧諸国は一

九五六年の日ソ共同宣言以降にしか日本との国交を樹立していないのである。東欧諸国で「異端児」扱いされていたこの時期のユーゴスラヴィアの実像を理解する上で、高橋正雄が訳出したV・デディエ（Vladimir Dedjic）によるティトーの評伝『チトーは語る』（河出書房、一九五三）の影響は大きかったと考えられる。なお、国交回復に至るプロセスについては、秋津那美子氏による詳しい紹介がある。⁽³⁵⁾

一九五二年八月二五日、ベオグラードに日本公使館が設置され、まず中村銈司臨時代理公使が着任した。最初の特命全権公使である広瀬節男が着任したのは、それから一年以上経つた一九五三年一月一五日のことである。一月二四日に行われた国書捧呈式の様子は、同じ時期に国連機関の技術指導員（銅山開発）としてユーゴスラヴィアに滞在していた久留島秀三郎の著書『バルカンの赤い星・ユーゴスラヴィヤ』（相模書房、一九五四）に記されている。一方、一九五二年一月にユーゴスラヴィア側も東京に公使館を開設し、一月二〇日には初代公使としてM・バーチェ（Maks Bacek）が着任している。

国交回復より早い時期に日本を訪れたユーゴスラヴィア人（あるいはクロアチア人）に関する記録は確認できていないが、この時期にユーゴスラヴィアを訪れた日本人については、新聞・雑誌記事から窺い知ることができる。ジャーナリストとしては、朝日新聞の元特派員である田口二郎（一九四八年）、毎日新聞の記者林

二郎（一九五一年）らが挙げられる。⁽³⁶⁾

国交が回復してからは経済協力も急速に進み、人的交流もさかんにになった。とくに日本社会党は一九五二年一月に開催されたユーゴスラヴィア共産党大会に党員を派遣しており、その後もたびたび代表団をユーゴスラヴィアに送っている。また、一九五五年には久留島秀三郎を会長として日本・ユーゴスラヴィア協会が結成された。しかし、それに比べて、日本におけるユーゴスラヴィア（あるいはクロアチア）の文学・文化に対する関心は依然としても低いままであった。ユーゴスラヴィア文学の初めての本格的な紹介となるのは、一九六六年に恒文社の「現代東欧文学全集」の一篇として刊行されたI・アンドリチ (Ivo Andrić) の『ドリナの橋』(松谷健二訳)とM・ブラトヴィチ (Mirodrag Bratović) の『ろばに乗った英雄』(大久保和郎訳)であり、それでさえドイツ語およびフランス語からの重訳だったのである。一方、ユーゴスラヴィアでは戦後まもなくから日本文学の紹介が始まったが、やはり英語などを通じての重訳しか存在しなかった。重訳ではない形で日本におけるユーゴスラヴィア文学の紹介、ユーゴスラヴィアにおける日本文学の紹介が行われるのは、いずれも一九七〇年代のことである。

おわりに

本稿では、クロアチアと日本の交流史を第二次世界大戦後の国交回復までの時期に限定して考察してきた。まだ確認できていない部分が多く、幾つかの疑問点が残されているが、大まかな見取り図を提示するという当初の目的を果たすことはできたのではないかと。総じて濃密な交流があったわけではないが、クロアチアと日本の間では、第二次世界大戦中の「クロアチア独立国」のような特別なケースを除けば、直接的な利害関係が生じにくいだけにかえって友好的な関係を継続してきたことは確かであろう。今回は取り上げられなかった第二次世界大戦後、現在に至るクロアチアと日本の交流史、さらにはクロアチア以外のバルカン諸国と日本との交流史全般の総体的な把握を今後の課題としたい。

注

- (1) 『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』収録論文のうち、とくに田中一生「日本とユーゴスラヴィア文化交流の歴史と現状」(一七〇～一七三頁)、リリヤナ・ジュロヴィチ「ユーゴスラヴィアと日本文化交流の歴史と現状」(一三三～一三七頁)が参考になる。
- (2) 寺島憲治「日本・バルカン交流史——日清戦争以前」『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』一八二頁。
- (3) 久米邦武編「特命全権大使米欧回覧実記」第四卷(岩波文庫、一九八〇)三六六頁。

- (4) 同書、三六六頁。
- (5) 同書、四〇六頁。
- (6) ペーター・パンツァー『日本オーストリア関係史』(創造社、一九八四)一七八頁。
- (7) ジュエロヴィチ「ユーゴスラヴィア—日本文化交流の歴史と現状」一三四頁。
- (8) Vladoje Pastoric, *Rusko japonski rat*, Sisak: Janko Dujak, 1904, 52 str.
- (9) 長瀬鳳輔・内藤智秀『現代バルカン』二七二—二七三頁。
- (10) 柴宜弘「戦間期—日本人のユーゴスラヴィア認識—」菅田均を中心にして「日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究」二二二—二二三頁。
- (11) その間の在ルーマニア特命全権公使は堀口九万一(一九二四年二月—一九二五年二月)、武者小路公共(一九二五年八月—一九二八年八月)、藤田栄介(一九三〇年七月—一九三三年一月)、同年一月—一九三六年六月)、栗原正(一九三七年五月—一九三八年一〇月)の四名。それ以外は臨時代理公使。以下、在外公館および外交官のデータは、秦郁彦編『日本官僚制度総合事典1868—2000』(東京大学出版会、二〇〇一)等による。
- (12) その間の在ハンガリー特命全権公使は井上庚二郎(一九三九年九月—一九四〇年九月)、大久保利隆(一九四一年二月—一九四三年一月)の二名のみで、それ以外は臨時代理公使。一九四四(昭和一九)年二月—二二日引揚。
- (13) 柴宜弘編『バルカン史』(山川出版社、一九九八)二七七頁。
- (14) 例えば、「ダルマティヤの首都ゾラ」[ザダル]市には、ダルマティヤ議会と政庁とがある(二四七頁)と記されているが、第一次世界大戦後ザダルはイタリア王国に割譲され、ユーゴスラヴィア領に含まれてはいなかった。一方では、第一次世界大戦の結果として「従来ドイツ語を強制的に用ゐさせられてゐた」[ザグレブ]市民は、断然ドイツ語

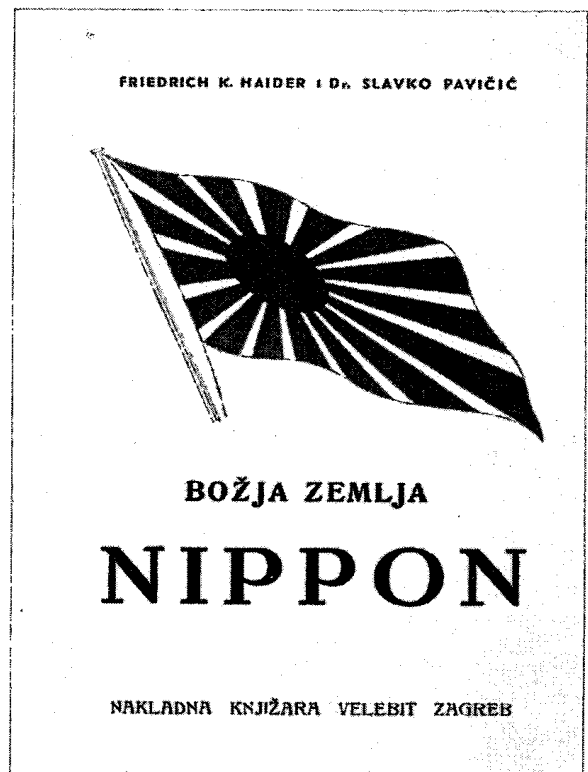
を廃して、クロアティヤ語を用ゐてゐる。…ドイツ語の新聞を廃して、英・仏語に改めるなど、徹底的にドイツ排撃を続けてゐる。…建物などの様式はドイツに染んだものが多いが、最近はフランス式に改めるべき」とめてゐる(二四〇頁)といった記述も見られる。

- (15) Jovan Agedic, *Na putu - daleko od kuće - po Istoku*, Sombor: n. s., 1924, 102 str.
- (16) Mihailo S. Radovanovic, *Istorijsko-geografske i ekonomske osnovne japonske imperijalizma*, Beograd: Privredni pregled, 1932, 32 str.
- (17) H. M. Lorenz, *Zasto ratuje Japan?*, Zagreb: F. Grkovic, 1933, 48 str.
- (18) Kazimierz Bielawskich, *Novi rat Rusije i Japana*, Zagreb: MOSK, 1934, 32 str.
- (19) M. J. Marinkovic, *Japan i Japanci*, Beograd: Stamparija Mlada Srbija, 1935, 242 str.
- (20) Milos Crnjanski, "Pesme starog Japana," *Letopis Matice srpske*, 311, Beograd, 1927, str. 127-141; "Haikai," *Letopis Matice srpske*, 312, Beograd, 1927, str. 292-303; *Pesme starog Japana*, Beograd - Sarajevo: Napredak, 1928, 64 str.
- (21) Zlatko Gorjan, *Lirika Zlatog Istoka*, Zagreb: Binoza, 1932. 第二次世界大戦後、ゴリヤンは『現代日本詩集』(Antologija moderne japonske lirike, Zagreb: Matice Hrvatska, 1961, 136 str.) を刊行した。
- (22) Ante Cettineo, *Savremeni japonski pjesnici*, Split, 1936, 96 str.
- (23) Zlatko Spoljar, ed., *Japonske narodne price*, Zagreb: Dječje knjige, 1923.
- (24) Lafadio Hearn, *Kokoro: pripovijesti i studije iz japonskog života*, Zagreb: Zaklada tiskare Narodnih novina, 1924, 191 str.
- (25) ジュエロヴィチ「ユーゴスラヴィア—日本文化交流の歴史と現状」一三五頁。

- (26) 率先して「独立国」を承認したのはドイツ、イタリア、ハンガリーであり、四月中にスロヴァキアとブルガリア、五月にルーマニア、六月に日本とスペイン、七月に中華民国、フィンランド、デンマーク、八月に満州国がこれに続いた。Fikreta Jelic-Butic, *Ustase i Nezavisna Drzava Hrvatska 1941-1945*, Zagreb: SN Liber, 1977, str. 95.
- (27) Mladen Colic, *Takozvana Nezavisna Drzava Hrvatska 1941*, Beograd: Delta Pres, 1973, str. 113.
- (28) Ivo Omrcanin, *Hrvatska 1941, 1*, Zagreb: Ivo Omrcanin, str. 394-396.
- (29) *Ibid.*, str. 405-406.
- (30) Friedrich K. Haider, *Bozja zemlja Nippon: povucino o Japanu*, Zagreb: Velebit, 1942, 63 str.
- (31) Kazuichi Miura, *Japanac o Japanu*, Zagreb: Velebit, 1944, 96 str.
- (32) *Novine*, 22. V. 1944, *Hrvatski Narod*, 11.II.1944, 23.IV.1944, 27.V.1944, *Hrvatski zenski list*, Kolovoz, 1944, *Novi Hrvatska*, 9.VII.1944.
- (33) F. Mesner, *Japan: burni problemi Tihog okeana*, Beograd: Jugostok, 1942, 163 str., *Japan i njegova snaga*, Beograd: b.i., 1942, 29 str., Fridrich Ziburg, *Celici cvet: putovanje u Japan*, Beograd: Jugostok, 1943, 212 str.
- (34) 荻田均『バルカン』に関しては、柴宜弘「戦間期—日本人のユーゴスラヴィア認識—荻田均を中心に—」『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』二二三—二三四頁等を参照。
- (35) 秋津那美子「戦後における日本—ユーゴスラヴィア関係—日本—ユーゴスラヴィア国回復の過程とその結果—」『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』二五三—二五五頁。
- (36) 田中一生「日本—ユーゴスラヴィア文化交流の歴史と現状」一二九頁。



『日本人が語る日本』(1944)



『神国日本』(1942)